いち押しBOOKS

あとは　マカセル　おまえに

タイトルに引いたのは浅川マキさん（若いコたちはたぶん知らないと思う）の曲「こぼれる黄金の砂ーWhat it be like」の一節で、『シャングリラの予言』続の巻頭に引かれているものです。かまやつひろしさんはこの本を評して「江戸っ子のよたばなしを聞いてるみたいでよござんした」といったそうです。大手レコード会社の会長であるＩ氏はこの本の出版記念パーティーで"クラブ・シャングリラ"を主宰する"ミック"と"マッケンジー"を評して、"サイケデリックなサイモン&ガーファンクル"と呼んだそうです（Ｉ氏はまだ若いヒッピーだった"ミック"にはじめてライナーノーツを書かせてくれた人物とのこと）。

"クラブ・シャングリラ"のはじまりを簡単に紹介しておきます。『エスクァイア・ジャパン』編集部の依頼を受けた"マッケンジー"こと森永博志さんが、「植草甚一氏のコラムのカジュアル感と淀川長治氏のTVでの映画解説のスピード感がひとつになったような都会的な情報ページ」をと企画したのが発端。しかもデュオでやる。相手に選んだのは、69年以来つきあいのある"ミック"こと立川直樹さん。僕にとって"ミック"はセルジュ・ゲンスブール関連の仕事の人、ピエール・バルーのレコードプロデューサー（『Le　Pollen』や『Sierras』は今も大好きなレコード）ですが、『マルサの女』以降の伊丹十三映画の音楽監督といったほうがわかりやすいでしょうか。"マッケンジー"はいろんな雑誌の特集企画のかたわら小説も書いているから、名前を目にしたひとも多いはず。この二人が月に1回"クラブ・シャングリラ"で会って、お互いの遊びのほど（音楽、映画、アート、本、ご馳走のことなどなど）を雑談する、という趣向で生まれたのがこの『シャングリラの予言』正と続です。

「偉大なる60年代サブカルチャー」を体現する"ミック"と"マッケンジー"に敬意を表して、ひとは「遊ぶことに命をかける不良壮年」といいます。アングラ魂で世界を股にかける二人のパワフルな雑談（対談でなく雑談というところがミソ）は、かなりのカッコよさ。少し長いのですが、一部読者のあいだで名文といわれている"マッケンジー"の文章を引いて、紹介を終えることにします。

「社会や私生活の事情で、多くの人は日々の享楽をあきらめてしまう。日々の営みを軽んじ、一生を精神論や人生論という五感とは関係ない理論でとらえようとする。でも日々にすべての事は起こり、日々のいつかに人生の終わりは来る。金は使わなければ貯まるが、時は使わなければ消え去り貯めることはできない。（…）1969年に出会った頃と、僕らは何も変わっていない気がする。町にはいまもジミ・ヘンが流れ、ストーンズが来日し、ゴダールは人気者で、デニス・ホッパーはスターだ。すべては何も変ってない気がする。」　（森　俊司）

シャングリラの予言、続シャングリラの予言
立川直樹　森永博志著
（講談社　1995.3、　東京書籍　2002.7）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 貸出図書BEST10　社会科学 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

1. **刑法講義各論 第4版補訂版**　大谷実著
   成文堂　1995（326.2||094）
2. **口述刑法総論 第2版（口述法律学シリーズ）**　中山研一著
   成文堂　1983（326.1||N45）
3. **ゼロから始める民法入門 第2版**　高橋裕次郎監修
   三修社　2002（324||Z3）
4. **物権法 第2版補正版（伊藤真試験対策講座:2）**　伊藤真著
   弘文堂　2002（324.2||I89）
5. **監獄の誕生:監視と処罰**　ミシェル・フーコー著/田村俶訳
   新潮社　1977（326.4||F42）
6. **手にとるように法律用語がわかる本:複雑化する"法"の網目を解き明かす! 改訂版**
   阿見欧志著/土肥将人監修　かんき出版　2001（320.3||A45）
7. **ゼロから始める刑法入門 第2版**　高橋裕次郎監修
   三修社　2002（326||Z3）
8. **刑法講義総論 第4版**　大谷實著
   成文堂　1994（326.1||094）
9. **ゼロから始める憲法入門 第2版**　高橋裕次郎監修
   三修社　2002（323.14||Z3）
10. **入門講義刑法総論**　川端博著
    一粒社　1998（326.1||Ka91）

（2002.4.1～2003.3.31の貸出データによる）